

巻頭言

「広島大学保健学ジャーナル」創刊にあたって

編集委員長 梶原博毅

平成13年度から、広島大学医学部保健学科が機関誌「広島大学保健学ジャーナル」(Journal of Health Sciences, Hiroshima University)を発刊することになった。

平成4年4月に広島大学医学部保健学科が創設された当初から、すでに機関誌の必要性がいわれてきた。その最も大きな理由の一つは、広島大学医学部保健学科における理学療法学専攻及び作業療法学専攻が、我が国における最初の4年制大学教育であること、又、看護学専攻が、西日本の国立総合大学における最初の4年制大学教育であることから、我々の学科は全国に向かって教育、研究の成果を発信する必要があるということであり、第二に、大学院設置に向かってできるだけ多くの、質の高い業績を発表し、西日本の拠点校として全国に誇れる大学院を設置する必要があること、第三に、若い教官及び研究者に研究の意義と論文発表の楽しみを実感してもらうことであった。しかし、保健学科独自の機関誌の発刊は今日まで実現しなかった。その理由の第一は、広島大学医学部の機関誌としてすでに「広島大学医学雑誌」及び「Hiroshima Journal of Medical Science」の和文及び英文雑誌のあることである。即ち、保健学科の和文、英文の論文は、既存の医学部の機関誌に投稿すればよいという意見である。第二に、これまでの医療技術系大学の学部・学科の発刊する機関誌、いわゆる「大学紀要」が学術的に十分な評価を受けているのか、ということ。第三に、保健学科で独自の機関誌を発行するにはかなりの予算が必要である。などがその主な理由であった。当初は反対意見が優勢であり、機関誌発刊の機運が熟していなかったともいえる。

一方、大学院博士課程(前期、後期)の設置も完了し、大学院学生の増加とともに、保健学科における研究が、質、量ともに向上し、大学院学生の学位論文も国際的なレベルのものが見られるようになった。しかし、これら若い研究者が、現時点で自分の研究成果を和文又は英文で十分に論文発表できる力が備わっているかといえば、必ずしもそうではない。従って、若い研究者の論文発表を教育・指導するためにも機関誌が必要となってきた。

又、一方では、我が国の行政改革の一環として国立大学の改革が問題となり、現在では、全国の国立大学は独立行政法人化に向かって進行しつつある。従って、各大学は独自の改革を迫られ、自己点検・自己評価及び外部評価が行われ、大学改革に取り組んでいる。その一環として、広島大学医学部も内部評価のみならず、外部評価(大学外の有識者による点検・評価)が行われ、大学改革を断行中である。

外部評価により指摘された保健学科の問題点の一つが、機関誌を発刊していないこ

とである。早急に機関誌を発刊し、保健学科内部の教育、研究の成果を外部に発信すべきであるとの指摘であった。

機関誌発行に関しては、賛否両論あると思うが、すでに述べた如く、我が広島大学医学部保健学科は、西日本の国立総合大学における医療技術教育の起点であり、理学療法学、作業療法学教育においては、我が国の最初の拠点ともいべきものであることから、我が保健学科の動向は、常に他大学から注目されていることはいうまでもない。これを機に、独自の機関誌を発刊し、広島大学医学部保健学科の教育、研究の成果を全国に発信する必要があるものとする次第である。

機関誌「広島大学保健学ジャーナル」は、年間2回（No. 1, 2）発刊し、No. 1には教官の原著を中心に、又、No. 2には教官、大学院学生の原著と各研究室の紹介を中心として掲載する予定である。

機関誌に限らず、一般に雑誌というものは、その創刊は比較的容易であるが、それを継続してゆくことは非常に困難であるといわれる。

私は、来年（平成14年）3月、定年退官する身ではあるが、保健学科創設時から機関誌発刊を主張してきた一人として、今回、「広島大学保健学ジャーナル」の創刊に携わり、教官全員の協力を得てやっと保健学科の機関誌：「広島大学保健学ジャーナル」（第一巻、1号）を発刊するところまで来た。これまで長い道のりであったが、感慨一入である。この創刊号と、これから発刊される機関誌を読まれた方々には忌憚のないご批判とご指導を賜わり、できる限り質の高い機関誌としたいものである。

平成14年度からは、新編集委員が引き続いて第2巻以後を発刊する予定であるが、これを起点に保健学科の機関誌「広島大学保健学ジャーナル」が、全国に誇れる雑誌に成長してゆくことを心から念ずる次第である。

平成13年9月 研究室にて